

北朝鮮問題を風化させるなかれ

特別手記元総理秘書官が初めて明かす「拉致交渉」秘録

極秘訪朝、厳寒の敵地で繰り広げた
「金正日最側近」との暗闘8日間

井上義行

元内閣総理大臣秘書官

荒涼の街

零下17度。生まれて初めて経験する12月の平壌は予想を遥かに超える極寒の地だった。

この国唯一の国際空港、順安空港に降り立つた高麗航空のVIP席で、すべての旅客が機内から姿を消すまで待たされた私は、たったひとりでVIP専用バスに乗り、わずか数分で着く待合室に向かった。

そこで、バスポートと携帯電話を預けるように指示された。バスポートは、「万が一のことがあったときに巻き込

まれて、失くすと帰れなくなってしまふから」、携帯電話は「預けることになっている」というのがその理由だった。

私は、その携帯電話で、わずか1時間ほど前、北京空港から搭乗直前に、日本で2人の幼い子供と私の帰りを待つ妻に電話をかけていた。

「もしかしたら、これが最後の電話になるかもしれない。そのときは子供をよろしく頼む」

預ける前に、私は携帯電話のデータをすべて消去した。

このまま私が失踪したとしても、な

にも足跡は残されないのだな、不意にそんな思いが脳裏をかすめた。私がこの国に来ていることを知っているのは、小泉純一郎総理（＊以下、特別の断りがない限り、肩書きは当時のもの）と安倍晋三内閣官房副長官の他は数人に過ぎなかったからだ。

差し向かれたベンツに乗り、宿泊先の大同江の中州にあるホテルに向かった。同行する付き添いの男は、頬が痩せこけ、訛りのあるカタコトの日本語を話した。

その頃、私の顔はそれほど知られてはいなかつたが、念のために薄いサン



グラスをかけ、スーツの上に緑色の薄手のジャンパーを着て、なんの変哲もないビジネスマンに変装していた。身を切るような冷気におもわず身震いしたが、それは単に薄着だからではない。眼にした街の風景があまりに荒涼としていたからだ。

除雪車がないせいか、人々は手作業で雪かきをしていた。交差点にはほとんど信号機がなく、手信号で交通整理をしていてが、行き交う車の姿は少なかつた。公園の片隅で、地面を掘り返し、銅線を拾っている人もいた。

それでも、なんと人影の少ないことか。テレビの報道などでよく目にした、街行く身綺麗な市民たちの姿や、車両の群れはなんだつたのか。

交渉人「Z」

ホテルは閑散として客の姿はほとんどなかつた。北が盗聴を行うことはよく知られたことだ。暖房が効かないせいか部屋は寒い。試しに、私は「この

部屋はすごく寒いな」と呟いて、部屋を出た。

ところが、部屋に戻ると、布団が一枚増え、それまでなかつたオイルヒーターが置いてあるではないか。部屋を出たのはわずか5分ほどの間。付き添いの男は、「井上さん、これでもう寒くないです」と言ったが、この男に、「寒い」と話しかけたことはなかつたのだ。

彼は、決して部屋に入つてくることはなかつたが、私が部屋を出てロビーに下りると、違う階にいるはずなのに必ず姿を現した。

午後、会談が行われる高麗ホテルに向かつた。午後2時。会議室に通されると、交渉担当の男がすでに席に着いていた。

名前を仮にZとしておく。私はその

名前を聞いているが、それに大きな意味はない。なぜなら、この国では、幾つもの名前を、機会に応じて使い分けるのが普通だからだ。Zは、軍と党の

両方に籍を置いているようだつた。FAXや電話では、それまで何度もやりとりをしていたZだつたが、顔を見るのはこれが初めてだつた。

年齢は45歳から55歳の間ぐら。恰好がよく、背丈は私（身長162cm）とほぼ同じくらい。二重まぶたで、スボーツ刈りのような短髪で、オールバックのように見える髪型。スーツ姿で、もちろん胸には金正日バッジを付けている。彼の口から出る日本語は驚くほど流暢で、日本人が話しているようにしか思えなかつた。

が、Zの丸顔を見た瞬間、ハッと胸を衝かれた。その顔は、この国の至る所に掲げられているあの建国の「首領」金日成の若い頃にそっくりだつたのだ……。

極秘プロジェクト発動

私は2003年12月20日～23日と、翌2004年1月17日～20日の二度にわたり、密命を帯びて北朝鮮（朝鮮民

主主義人民共和国）の首都・平壤を極秘裏に訪問した。

この極秘訪朝の全容は、政府のごく限られた関係者にしか知らされず、現在まで封印され続けてきた。しかし、今回、私は、この経過を公表することを決意した。それは以下のようない由による。

先ず、政権交代が行われ民主党政権が誕生したが、拉致問題がいまだに解決の糸口を見いだせないままであること。それどころか、この問題に対する国民の関心が薄らぎはじめ、風化を止められない状況に陥っていること。さらなる関心の喚起が必要とされているにもかかわらず、それすらできていなこと、等である。

私の経験が、膠着状態にある拉致問題の突破口をひらくための一助になつて欲しい、国家として絶対に放置することの出来ないこの問題に、多くの国民が再度、目を向けて欲しい、この思いで私は、長く守ってきた沈黙を破る

ことにしたのだ。

さて、具体的な経過に触れる前に、私がなぜ拉致問題にかかわるようになつたのか、その前史を述べておきたい。

私は1963年、神奈川県小田原で生まれた。家は貧しく、家族4人で6畳2間の市営住宅に住み、ときにはサケ缶を家族で分け、煮汁で炒めたキャベツをおかずにして食べた。

高校を卒業後、日本国有鉄道（現在のJR）に就職。働きながら日本大学経済学部（通信制）を卒業した。しかし、1988年、国鉄民営化に伴う人員整理で、内閣府（旧総理府）に転職。

新官邸整備、内閣第一係長を歴任し、2000年、小渕内閣の額賀福志郎官房副長官の事務秘書官となつた。

その後、後任として副長官となつたのが安倍晋三氏だ。当時、社会的関心が薄かつたこの問題に熱心に取り組んでいた安倍氏との出会いである。これ

ことになる。

2002年9月17日、小泉純一郎首相が電撃訪朝し、金正日総書記との間で日朝平壤宣言を締結。この宣言に基づき帰国した5人の拉致被害者（蓮池薰・祐木子夫妻、地村保志・富貴恵夫妻、曾我ひとみさん）のために、拉致被害者支援法の作成を安倍氏と共に主導することになった。

その後、政府は5人の永住帰国を決定するが、周知のように北朝鮮は「一時帰国」の約束を破つたと日本政府と外務省を激しく非難。特に、小泉訪朝の事前交渉を担当した田中均アジア大洋州局長（当時）を「嘘つき」と罵倒し、交渉担当者が攻撃的となる事態となり、外務省を通しての交渉は、完全に暗礁に乗り上げてしまった。

この膠着状態のなかで、一つの極秘プロジェクトが動きだしたのだ。

このプロジェクトのメンバーは、安倍官房副長官、中山恭子内閣官房参与（拉致問題担当）、谷内正太郎内閣官房

副長官補、それに内閣官房副長官秘書官の私の4人。目的は、膠着状態を開し、北朝鮮から帰国した拉致被害者の家族全員の日本への帰国と、帰国した方以外の拉致被害者や、死亡したといわれた方々を取り戻すことだった。

仮文書

表向きは完全に動かなくなつたように見えた日朝交渉だが、裏では、政治家、実業家など様々なる一派をして、北朝鮮側からのアプローチが続いていた。しかし、私たちは先ず、そ



2003年12月21日、平壌・大同江に面する「主体思想塔」(高さ170m)の前に立つ筆者。

権限を持つているのかを探つてきた。私の経歴や写真を要求してくることもあつた。北朝鮮は、基本的に権限のある人間としか交渉しようとはしない。それは

と同じで、私がど
のか、どの程度の

の輻輳する幾つものルートを精査する必要があった。

北朝鮮側は、「日本が約束を破つたのだから家族を帰すという話はなしだ」「一時帰国した5人をいつたん北朝鮮に戻し、そこで家族と話し合いをして帰国するかどうかを決めれば良いではないか」と様々な主張をしてきた。それは、要約すると「謝罪せよ」「拉致被害者を平壤に戻せ」「国交正常化を認めよ」の3条件を呑めということだった。

FAXで何度も互いの目
い、調整を繰り返した。

朝交渉の細部に至るまで知っていた。
2003年の秋から年末に向け、次
第ニ歩は具体的となり、電話の三抵

方針として、冷徹なまでに貫かれていくといえる。

対する我々の基本的姿勢は明確だった。

拉致問題の解決なしに日朝国交正常化交渉はありえない。政府は、北朝鮮が死亡したと通告してきた拉致被害者を含め、拉致被害者及びその家族全員が生存しているという前提に立ち、彼らの奪還をめざす。

交渉は、最終的にお互いが合意したことについて、仮文書の形にするところにまで至った。

その文書は、安倍氏の代理（＝私）と北朝鮮の金永南・最高人民会議常任委員長の代理との間で交わされる形式をとり、三つの項目からなっていた。

それは、

1、日朝両政府は、日朝平壤宣言を有効と認識し、履行することを再確認する。

2、北朝鮮は日本に帰国した拉致被害者5名の家族（配偶者及び子供）を

日本に帰国させる。5人の拉致被害者の帰国にあたり、相互理解が不足して

いたことについて、日本として遺憾の意を表する。

3、拉致被害者の家族の帰国後、直ちに日朝正常化交渉を再開し、他の拉致問題の解決も含め、日朝正常化の実現を図る——という3項目である。

項目2では、拉致被害者の家族の帰国方法が具体的に書かれていた。すなわち、日本側は当日、安倍内閣官房副長官及び政府関係者が拉致被害者5名とともに専用機で北朝鮮に行き、機内もしくは空港内のしかるべき施設で家族を迎える、という手順である。

私の密命とは、北朝鮮に極秘に入国し、この文書に安倍氏の代理人として署名することだった。

るために行動する議員連盟）事務局長の平沢勝栄（自民党衆議院議員らと、北京で会談する。この会談は注目され騒ぎになると思われる所以、この騒ぎに隠れて訪朝して欲しい」

この会談については、後に、この席で北朝鮮側が、拉致被害者が平壤に家族を迎えることを条件に、被害者

家族の帰国を提案したことが報じられたが、それまで一切の報道はなく、政府としてもこの会談の申し出を把握していないかった。本当にこんな会談の予定があるのか。にわかには信じられないなかつた。本当にこの会談の予定があるのか。にわかには信じられないなかつた。平沢氏本人がこの時点でもまだこの話を知らなかつた。が、数日後、平沢氏から安倍幹事長に、この会談の

ために北京へ行くことになりましたという報告があつた。やはり、乙の言うことは事実だつたのだ。

乙の提案には賭ける価値がある、私たちはそう判断した。

私の極秘訪朝はこのとき、実現への最終段階に入ったことになる。

12月19日、私は中山参与が手配してくれたJALのエコノミークラスで北京に向かった。ちなみにこの訪朝にかかる経費は、中山参与と私のポケットマネーでまかなわれた。

パスポートは一般のもの。公用旅券を使うと、北京の外務省経由でビザ取得を行うことになり、中国政府に私の動きが知られることになる。内密に行動するには、個人の資格で動いた方がいいと判断したからだ。

小泉総理には安倍氏から数日前に、

この極秘訪朝計画が伝えられ、文書の内容についても了承を得ていた。

北京到着後、すぐに北朝鮮大使館へ行き、ビザの申請を行った。事前に私の経験などは北朝鮮側に送つてあり、ビザ申請書は事前に用意されていた。それには署名を除いて、必要な項目が既に書き込まれていた。

この段階でも私はまだ半信半疑だったが、驚いたことに、申請書を提出し

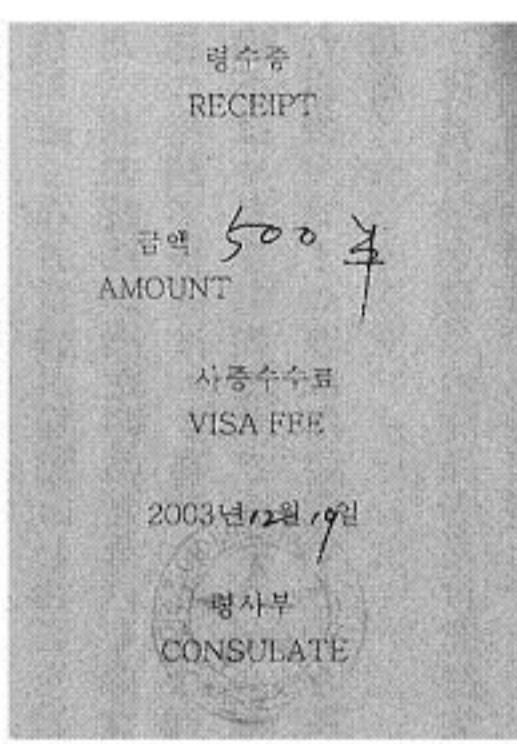
てからわずか1分足らずでビザが下りた。北朝鮮のビザ発行は、通常の場合、半日はかかると外務省から聞いていた私は、北朝鮮の特別の配慮を感じ、極秘訪朝の実現を確信した。

高麗航空のカウンターでビザを出すと、既に私の名前で、翌20日午前9時の便に、カーテンで一般席とは仕切られたVIP席が予約されていた。

高麗ホテル「特別室」

場面を再び平穡、高麗ホテルの会議室に戻そう。

テーブルを挟み一対一で向き合つた



Zは、自分が不利なときには黙る。自分が質問したことに関しても、こちらが答えるまでは話を先に進めない。Zの交渉の進め方には、様々なシミュレーションの中で、言葉を削ったり加えたりすることに熟達した、プロフェッショナルな外交テクニックと幅広い政治経験を感じさせるものがあった。

彼は、どちらかというと、策士タイプではなく、石橋をたたいてわたるタ

日に、Zは、事前の電話でも何度も繰り返したように、自分が、「トップ」から日朝交渉の全権を委任されていることを強調した。

午後2時から始まった会談は、文書の一字一句の意味を確認する作業に費やされた。

例えば、Zが、「この文書にある『他の拉致問題』というのは、どの範囲までを指すのか」と聞く。

私は「日本で言う拉致認定被害者と、その他の特定失踪者まで含まれる」と答える。

Zは、自分が不利なときには黙る。自分が質問したことに関しても、こちらが答えるまでは話を先に進めない。Zの交渉の進め方には、様々なシミュレーションの中で、言葉を削ったり加えたりすることに熟達した、プロフェッショナルな外交テクニックと幅広い政治経験を感じさせるものがあつた。

彼は、どちらかというと、策士タイ

イプ。はつたりめいたことは一切口にせず、非常に慎重に言葉を選びながら話をする。とても知的な人物だという印象を受けた。その一方で、「トップ」にたいする忠誠心も感じた。

話が核心に触ると、話し方はいつも慎重になり、それが彼が担つている責任の重さを窺わせた。

感情を露わにすることはほとんどなく、唯一、アメリカの話になつたときだけは、怒りをぶちまけ、エキサイトした。

乙は、「拉致被害者家族のうち、曾我さんの夫、ジエンキンスさんは難しいかも知れない、アメリカが敵前逃亡罪に問うのではないかと本人が心配して戻りたくないと言っている」とも話した。この段階では、まだ北朝鮮側はジエンキンスさんを帰すつもりはなかったようだ。

夕方5時まで続いたこの日の会談は順調に進んだ。

ただ、不思議なことがあった。相手

方から出されたコーヒーを飲んだ後に、急に眠くなり意識が朦朧とし始めたのだ。旅の疲れが出たのかとそのときは思ったが、普通はコーヒーを飲めば意識がはつきりするはずではないか。それ以後、コーヒーには注意することにした。

夜は、Zと数名の関係者だけを交えて、高麗ホテルの「特別室」で会食となつた。

この「特別室」は、20畳ほどの広さで、迎賓館を思わせるほど豪華な作り。日本でもあまり見かけたことのないような巨大な液晶スクリーンやカラオケセットが備え付けてあった。強い酒と豪華な食事が出されたが、係の者は配膳を終えると全員退出し、女性が待ることとなかった。

Zによれば、この部屋は、日本の外交団はもとより北朝鮮の外務省関係者も使うことの出来ない特別な部屋で、「高麗ホテルの特別室を使える立場の人物」と言えば、この国での高い地位

がわかる、とも話していた。また、Zは、食事は街のレストランなどは使わず、必ず個室を使うとも話していた。当時は、狂牛病問題が騒がれていた時期で、料理には牛肉ではなく駄鳥の肉が使われていた。

奇妙な行動と一団

翌12月21日は、午前10時から会談が始まつた。この会談も順調に運び、これまで以上は詰める部分はない、あとは署名するだけというところまで進んだ。

昼食を終えると、市内の観光スポット巡りに誘われた。金日成主席の巨大な銅像、チュチエ思想塔など、お決まりのコースを廻るのだが、その途中で奇妙なことがあった。

市内のある所で、写真を撮つてもらおうと白い大きな建物の前に立つたとき、カメラを持った付き添いの男が、「井上さん、この角度よりこっちの角度の方がいいですよ」と勝手にカメラのアングルを変えたのだ。その後、気

をつけて見ていると、男は空を仰ぐよ

うなカメラアングルを選び、地上の建物が極力写らないようにしていることに気がついた。

帰国後、私がその前に立ち、写真を撮ってもらおうとした建物の持つ重要性が判明した。その建物には、当時、曾我ひとみさんの子供たちが住んでいたのだ。

奇妙なことはまだあった。

ある観光スポットを訪れたときのことだ。団体の観光客とおぼしき一団が私に近づいてきた。その近づき方がなんとなく不自然なようと思えて気にならなかった。

Zが、「これからは、少し時間をかけてやりましょう」と言い出したのだ。

私は、狐につままれたような感じに襲われた。午前の会談を受け、安倍氏に、会談は順調に進んでいると電話で報告したばかりだったからだ。

私の日本との連絡手段は、高麗ホテルからかける国際電話しかなかつたが、この国際電話がすべて盗聴されていることは常識だった。携帯電話は空港で預けさせられていた。日本への固定電話からの連絡は限定して行うように努

つたが、私は次の場所に向かった。

私は、急にトイレに行きたくなつたふりをして、もといた観光スポットに引き返した。すると、草むらから、先ほどの一団が慌てた様子で飛び出してきたのだ。おそらく、ひと仕事（芝居？）終え、ほっとして休憩していた最中だったのだろう。

こんな奇妙な体験をした後、高麗ホテルに戻ると、会議の雰囲気が、午前とは一変していた。

Zが、「これからは、少し時間をかけてやりましょう」と言い出したのだ。

翌日も、事態は変わらず、署名にはいたらなかつた。おそらく、会談の報告を受けた「トップ」金正日の判断だつたのだろう。結局、次回、再度、交渉を継続して行うことを見認し、私は

12月23日、帰国の途についた。北京から成田への便は、JALではなく中華航空を利用した。

めっていた。

安倍氏の他には、中山参与にも電話をかけたが、この際は彼女を「お母さん」ということにした。事前に、中山参与とは、会談の感触がいいときは「桜が咲くときは」と言い、悪いときは「まだ少し吹雪いているので」と言う、といつた示し合わせをしていた。

「お母さん、今は帰れないけれど、もししかしたら春には帰つてこられるかも知れない」私は「お母さん」にこんな電話をかけた。

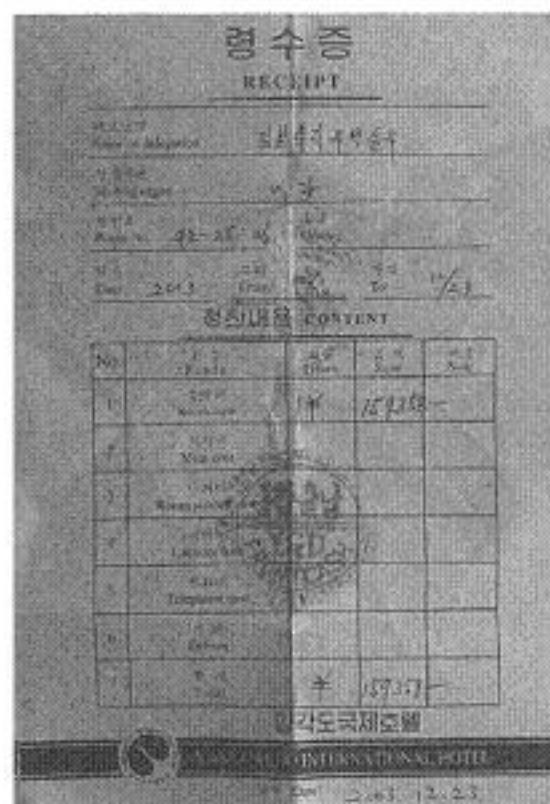
安倍氏の他には、中山参与にも電話をかけたが、この際は彼女を「お母さん」ということにした。事前に、中山参与とは、会談の感触がいいときは「桜が咲くときは」と言い、悪いときは「まだ少し吹雪いているので」と言う、といつた示し合わせをしていた。

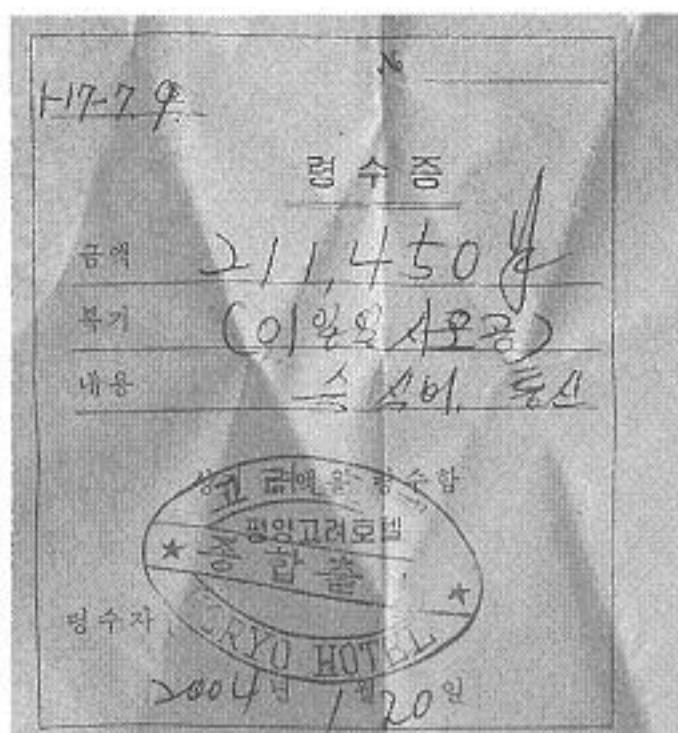
安倍氏の他には、中山参与にも電話をかけたが、この際は彼女を「お母さん」ということにした。事前に、中山参与とは、会談の感触がいいときは「桜が咲くときは」と言い、悪いときは「まだ少し吹雪いているので」と言う、といつた示し合わせをしていた。

安倍氏の他には、中山参与にも電話をかけたが、この際は彼女を「お母さん」ということにした。事前に、中山参与とは、会談の感触がいいときは「桜が咲くときは」と言い、悪いときは「まだ少し吹雪いているので」と言う、といつた示し合わせをしていた。

「何人出せばいいのか」

2回目の極秘訪朝は、翌2004年





要するに彼らは、日朝国交正常化へ向けてのロードマップを欲しがっていたのだ。交渉の途中から、日朝平壤宣言にある「朝鮮半島の核問題の包括的な解決」とはどういう意味かとか、「経済協力」の中には従軍慰安婦の問題が入っているはずだから、これについて事前協議をしようとか、様々な具体的な提案をしてきた。

私はその提案に対しては、これらは正常化交渉の中で話し合う問題で、その前に拉致問題の進展を見させてくれと主張し、押し問答が繰り返された。

さらには、経済協力の内容や実施までの道筋という話になり、私の方としては、実際に拉致被害者が何人生きていて、何人帰国することができるのかを言ってくれないと先には進めないと論議を押し返した。

すると、彼は、「拉致」の定義の問題を持ち出し、拉致とはどこまでの範囲を指すのかと聞いてくる。私は、特定失踪者まで当然入ると説明した。この問題は、日朝国交正常化交渉に入るために入り口だと強調し、正常化交渉の前に拉致問題をぜひ解決してほしいというのが政府の考え方だ、となんども強調した。

1月。北京から平壤への航空便の予約は片道だけ。交渉の延長もありうると考えたからだ。

宿泊は高麗ホテル。交渉は、前回にもましてゆっくりとしたペースになり、遅々として進まなかつたが、前回には見られなかつた傾向が現れた。

会談の内容の質が変化し、拉致被害者の家族の帰国という問題はほとんど出ず、日朝平壤宣言の内容や、正常化交渉の中身にまで踏み込んだ内容になってしまった。

極端なことを言えば、彼らは、正常

化さえできれば、「正常化交渉」などどうでもいいと考えていた。私も、どちらかといえば、名より実を取りたいと考えていたので、「再調査などしなくてもいい。そのかわり、拉致被害者を帰してくれ、調査などお互に時間の無駄じゃないか。だってあなた方はすべて知っているのだから」とも言った。

しかし、議論は平行線をたどり、最後まで文書にサインする段には至らなかつた。

私は、論議をこれ以上先に進めるのは、非常に危険だと感じた。なぜなら討議の過程で、一種の正常化交渉が始まっているという印象を受けたからだ。拉致被害者たちの家族の帰国がまだ実現していない、死亡したといわれた方々も帰つてきていない、そういう段階で次の段階である正常化交渉の中身に入つていこうとするのは、政府としてやるべきではない。彼らが持ち出してきた問題は、公式の外交交渉できつ

ちりと詰めるべき話で、私はそこにタッチるべきではないと考えた。

私は、拉致被害者を取り戻しに来たのであつて、あなたの方の言つていることは、それが済んでからの話だ、とも主張した。

すると、今度は、日本政府が言う「拉致問題の解決」は、なにをもつて「解決」というのだ、どこまでやれば「解決」したことになるのかと問うてくれる。

さらに、日朝平壤宣言は入り口なのか、出口なのか、あるいは極端な話、正常化交渉なしでも正常化はできるのか、「核問題の包括的な解決」とは、どこまでの過程を指すのか、といったこれまでを論議の俎上に載せようとした。

事前に、一応の想定問答は済ましていたので、想定の範囲で応答はできたが、この論議の過程で、私は5人の拉致被害者、蓮池夫妻、地村夫妻、曾我ひとみさんの子供たちや夫などは帰つ

てくる、これは時間の問題だなど確信した。

いよいよ、次の段階の話になつていく。それを、どう拉致問題全体の解決に結びつけるのか、新たな課題が浮かび上がつたことになった。

「小沢は我が國を裏切った」

雑談に応じたZから、日本の政治家に対する評価を聞いたことがあった。彼は理由は語らなかつたが、小沢一郎氏を「彼は我が國を裏切つた。信用できない」と評し、河野洋平氏、野中広務氏、鈴木宗男氏らを評価していた。その中に、現首相である鳩山由紀夫氏の名前が出たのに驚いた。日朝首脳会談を実現させた小泉首相を評価するのは当然としても、当時まだ野党にあつた鳩山由紀夫氏を評価していたのは不思議だつたからだ。私は、鳩山邦夫氏の間違いではないかと確かめたが、「兄の方だ」と断言していた。

またこの会談の過程で、私はZの地

位について新たな情報を得た。Zには、ドアを開けたり書類を運んだりする若い秘書が付き添っていたが、その若い男の前では、日朝交渉の表舞台にたびたび登場している、鄭泰和・日朝交渉担当大使や宋日昊・外務省日本担当副局長ですら最敬礼する、というのだ。

若い秘書がそのような地位にあるのなら、その上司がいかほどの重要人物かは、容易に推し量ることが出来る。おそらく、Zは、姜錫柱・第一外務次官や、金桂冠・外務次官といった外務省の役人とは次元が違う地位にいる人物ではないのか。つまり、金正日総書記直属の立場にあり、総書記の全権を委任され、対日交渉に携わっている人物。私はZをそう判断した。その後の交渉の経過を経て、この判断はますます確かなものになつていった。

2回目の訪朝は、片道切符だったのと、滞在を延長し、いわゆる正常化交渉の中身にまで入るという選択肢もあつた。しかし、私は外交は、「えいや

つ」でやるものではないと常日頃考えていたので、安倍氏に電話で経過を報告し、「私の気持ちとしては、この場では正常化交渉の中身についての議論はやるべきではないと思う。この論議は別の機会にしっかりと詰めた方がいい」と伝えた。

Zとは、来月も引き続き会談を開くことで合意し、帰国した。

ところが、帰国後、思いがけない事態が起きた。朝日新聞が、2月4日付けの朝刊で、私の極秘訪朝をすっぱ抜いたのだ。

この報道以後、内閣官房の一員である私は、マスコミにマークされ動きが取れなくなつた。さらに翌2005年3月、「週刊現代」が、北朝鮮が提供した資料に基づきこの訪朝を報じ、「三元外交」と安倍氏を批判した。

しかし、この批判は当たらない。私の訪朝には内閣官房が関与し、事前に外務省のレクチャーを受けた上で行われたもので、政府の方針と表裏一体の

ものだつた。現に、小泉総理自身が出て迎えに行つたという違いはあるが、その後の拉致被害者家族帰国への流れは、基本的に、私たちが北朝鮮側と交わそうとした文書の内容に沿つていて。そもそも外交とは公式、非公式を問わず、水面下で様々なルートを駆使して、国益にかなう実利を得るようにするものなのである。

ともあれ、この記事が出た段階で、私は、北朝鮮側が、交渉相手としての私を切り捨てたのだろうと感じた。

どうして知っているのか

2005年10月、安倍氏が内閣官房長官に就任し、私はその政務秘書官に就いた。すると、しばし途絶えていたZからの水面下のアプローチが再開された。

そして2006年9月、安倍氏が総理になり、安倍内閣が誕生。私が内閣総理大臣政務秘書官に就任すると、そのアプローチの度合いが増した。表で

は北朝鮮は、「拉致問題は解決済み」と強硬に主張していたにもかかわらず、Zは、「拉致問題について協議したい」と言つてきたのだ。

彼らは、対北朝鮮強硬派の安倍氏がいざれ総理になると予想はしていたが、極秘訪朝の資料を流して交渉相手として見限つた私が、総理の秘書官になるとは思つていなかつたのではないだろうか。

私はこう答えた。「あなたは私を裏切つたではないか。信頼関係をどう修復するのか。交渉は外務省とやればいい。私は公人で、海外へ自由に出ることもできない。ただし、そちらが大胆な行動をとるなら、こちらも政治的な判断をし大胆な行動で応えるつもりはある。いつもあなたが言つていた、『行動対行動』だ」

が、水面下の交渉を再開するとしても、Zがかつてのような権限をいまだに持つてゐるのか、確認する必要があつた。

あるとき、Zが「日本外務省の高官が、我が方の外務次官に、正常化交渉に向けた新たな提案をしてきた」と私の知らない話を伝えてきた。

その高官に事実を確認すると、「えつ？ まだ総理にも外務省にも話していない話なのにどうして知つているのですか？ 誰から聞きました？」この話は立ち話で、誰も聞いてはいないはず、それも、この話を相手にしたのはわずか1、2時間前ですよ」と驚いた。

Zは、日本の外交官の密かな耳打ちの内容を、数時間もたたぬうちに知つていたことになる。Zは、いまだに日本に関するすべての情報を掌握する対日交渉の総責任者の立場にいたのだ。

幻の「生存者リスト」

そこで、私はZにある条件を提示した。

「拉致被害者の生存者リスト」の提出である。

私は、かつての交渉の過程で、北朝

鮮がこれ以上、生存者はいないとしていた拉致被害者の生存を確信していた。なぜなら、Zは、拉致被害者に関し、「死亡」という言葉を一度も使わなかつたからだ。

小泉総理と会つたときの金正日総書記がそう「判断」したからしようがないじやないか、あの時にはトップがそう判断して、あのよう表現した、という言い方で、「死亡した」とは決して言わなかつたのだ。

Zは、交渉のためなら、第二国でも、日本へでもどこへでも出向くと言う。彼らとすれば、国民的人気のある安倍総理となるべく早期に国交正常化交渉に入りたいと考えていたのだろう。私としても、ぜひとも安倍内閣で拉致被害者の帰国を成し遂げたいと考えていた。

「生存者リストを出してくれば交渉に応じる」と私が言うと、Zは「わかった。では、〇月〇日に会つてくれ」と答えた。

さらに私が、「会うのであれば、生存者リストを持つてこなければダメだ」と念を押すと、Zは「わかった、私を信じてくれ」と言つた。

Zは、生存者リストを「出す」とは言わなかつたが、「私を信じてくれ」と繰り返した。

このやりとりは国際電話を通じて交わされたから、当然、盗聴され、北朝鮮当局のチェックを受けていたはず。さらに前述したように、Zは極めて慎重で冷静な人物で、軽々しいはつたりを言うことはなかつた。

私は、「拉致被害者の生存者リスト」は存在する、と確信した。つまり、北朝鮮側が死亡したと伝えてきた拉致被害者の中に間違いなく生存者がいるということだ。また、これにより交渉はかなり進展するのではないかとも思つた。

安倍総理は、みずからの政権で、横田めぐみさん、増元るみ子さんを含め、拉致被害者、特定失踪者を取り戻した

い、そして自分の時代で拉致問題の決着を付けたい、という強い思いがあり、この水面下の交渉を進めることができた。

2006年7月の弾道ミサイル7発発射に続く、10月の核実験を受け、当時、日本は北朝鮮に対し、すべての北朝鮮籍船舶の入港禁止などをふくむ制裁措置を課していた。

交渉の場は第三国、シンガポールが選ばれた。

安倍内閣の支持率が次第に低下するなかで、北朝鮮側は、この政権ではたして正常化交渉ができるのか、いましばらく様子を見ようという判断を下したのだろう。

Zは、総書記の判断がそのまま国の政策となる北朝鮮と違い、日本では選挙や世論の動向で政策が動くことを知っていた。

Zはまた、支持率が下がったことで、安倍内閣は、正常化交渉を引き延ばすのではないかと疑っていた。

私は何度も、「安倍総理はそんな人ではない。彼は、拉致問題がテレビな

常化交渉ともいえるものだつた。特に、北朝鮮の核実験を受け、核問題が前面に出でて重要課題となり、以前の交渉とは様相が変わつてきていた。

が、残念ながら、結局、生存者リストは出なかつた。両者の話が折り合わず、7月の参院選が終わつてから、再度、交渉するということになり、谷内氏は帰国した。

氏は帰国した。

安倍内閣の支持率が次第に低下するなかで、北朝鮮側は、この政権ではたして正常化交渉ができるのか、いましばらく様子を見ようという判断を下したのだろう。

Zは、総書記の判断がそのまま国の政策となる北朝鮮と違い、日本では選挙や世論の動向で政策が動くことを知っていた。

Zはまた、支持率が下がったことで、安倍内閣は、正常化交渉を引き延ばすのではないかと疑っていた。

私は何度も、「安倍総理はそんな人ではない。彼は、拉致問題がテレビな

どで取り上げられる以前から純粋にこの問題に取り組んできた人だ。彼が納得するかたちで拉致被害者が帰つてくることができたら、大胆な行動を起すのは間違いない」と強調したが、トップの疑いは解けなかつたようだ。

7月の参院選では自民党が敗北。安倍総理は病に倒れてしまつた。

退陣表明した後、入院した総理は、「横田さんや増元さんたちには申し訳ないことをした」と涙を流した。

Zからの連絡は途絶えた。

結局、参院選の敗北が、ターニングポイントになつてしまつたのである。もし、自民党が参院選で勝ち、それまで通り、安倍政権が強い支持を受けたままでいたなら、北朝鮮は、生存者リストを出していただろうし、何人かの拉致被害者が戻つてきたかも知れない。そう思うと、無念でならない。

政府の責務

最後に、北朝鮮との交渉に携わつた

経験から、私なりに得た教訓をいくつか挙げてみたい。

先ず、表ルートであれ裏ルートであれ、日本のメッセージを明確に伝えること。拉致被害者が帰つてこなければ国交正常化交渉は進められない。逆に言えば、拉致被害者が帰つてくれれば、どんなことでもできるとはつきり言うこと。それがブレるから、北朝鮮側は、拉致被害者を何人帰せばいいのか、あと2人か、3人か、ここまでやればいいのか、と時に応じて提案してくることになる。

必要なのは、北朝鮮に関する情報を集中管理する体制を作り、交渉に臨む基本方針を決め、政府も外務省も、国会議員も、これに沿う範囲で行動し、基本方針を動かさないこと。

この基本に従わず、国交正常化してもいいというメッセージを北朝鮮側に出すことは非常に危険で、拉致被害者の帰国がなければ正常化はないと明確に言い続けなければならない。いま、

民主党政権は、たとえ同じ人物ではないとしても、みずから独自に「Z」を探し出さなければならない。政権が変わろうとも、それが、我が国の政府の責務である。

(いのうえ よしゆき)

そのシグナルを、政府の誰が、どのように発信しているのか。何もしていないのではないかと危惧している。

「拉致被害者が生きているかどうかはわからないではないか」と言う人がいるが、少なくとも、死亡の証明がない以上、政府としては彼らが生存しているという前提で動くのは当然ではないか。

政府として、物事を推測で判断してはならないし、事実関係がはつきりするまでは拉致被害者の生存を前提に交渉を進めるべきだろう。そのためには、

金正日総書記から全権を与えられ、日本側の主張と自らの判断を総書記に伝えられる人物を探さなければならぬ。

131 極秘訪朝、嚴寒の敵地で繰り広げた「金正日最側近」との暗闘 8 日間